

シンポジウム／「世間」という問いから

「世間」再考

戸塚 ひろみ

最近、民俗学や口承文芸研究以外の領域で、「世間」という言葉が、日本の社会のありようをとらえるためのコンセプトとして、注目されてきている。西洋社会史家であった故・阿部勤也氏は、

ヨーロッパの人と人のつながりかたの歴史を問うてきた末に、それと日本の人と人のつながり方を、比較しながら検討するなかで、「世間」という概念に注目し、「世間学」という学を提唱した。

それは、「社会」という抽象的なコンセプトではなく、日本という歴史に規定されながら生きる私達が、日常で使ってきた言葉から、わたしたちの関係性の歴史と現在を考えていくという発想によるものであったといえる。

そして、この「世間」という概念を、学問の概念として積極的に位置づけたのは、民俗学、それも「世間話」という口承のジャンルを設定していた口承文芸研究であった。一九八〇年代から「世間話」を積極的にとりあげるようになった私達は、この「世間」というコンセプトを、正面から見据えることができる、もっと言ってしまうと、見据えなければならぬ立場に

居るのではないだろうか。

私達は、この「世間」という言葉により、人がことばを交わしあい、さらにはその「ことば」を使い「話」という表現様式によって、自分たちが生きている身の回りの世界や、また自分たちが生きてきた歴史をつくりあげ（構築）しながら生きていくということを具体的に検討してきた。

それは、「世間」というコンセプトを抽象的なレベルの単なる概念にしてしまわずに、常に、ひとの営みの現場から「世間」をとらえることを可能にできたといえる。

そこで、今回は、そうした私達の蓄積をふまえ、これまで「世間話」というと、どちらかというところ「話」に軸足を置いて展開してきたことを、むしろ「世間」というコンセプトに重心を移動させて考えてみることを目的として、シンポジウムを企画した。

「世間」は、少なくとも社会という概念とそのまま置き換えることができる言葉でもなく、単に人の集合をあらわすだけの言葉でもない。もっと、人と人、人と社会の関わり方を語ることでできる動きのあるコンセプトなのではないだろうか。

そこで今回は、これまで「世間話」研究をリードしてきた本会の会員である山田巖子氏、そして世間話というコンセプトを、伝説などとの関わりをなかで豊かに押し広げてきた野村典彦氏にご登壇いただき、さらに社会学の立場から、「世間」に切り込んでいただくために、東京大学大学院博士課程に在籍されている野田潤氏ぬぐみに参加していただくことにした。